

## 社 長 就 任 挨拶

ジェイカムアグリ株式会社

代表取締役社長 大 衡 一 郎



本年6月26日付けでジェイカムアグリ株式会社2代目社長を仰せつかった大衡です。

「農業と科学」をご愛読いただいております皆様一言ご挨拶申し上げます。この10月でジェイカムアグリ社が発足して、丸3年を迎えることが出来ました。これもひとえに関係者の皆様のご支援ご協力の賜物と感謝申し上げます。

ご承知のとおり、ジェイカムアグリ社は、チッソ(株)と旭化成(株)の肥料事業統合会社であったチッソ旭肥料(株)と、三菱化学(株)と日本化成(株)の肥料事業統合会社であった三菱化学アグリ(株)が合併して平成21年10月1日発足しました。発足以来、佐藤前社長(現常勤顧問)を筆頭に「融和と新しい力と夢の創出」をテーマに「総合力で日本一の肥料会社となる」、「農家のニーズにスピーディーに対応できる開発力、技術力、販売力を拡充し続けられる会社となる」、「安定した経営基盤を構築し、日本農業に貢献し続ける」といった経営方針の下、今日まで歩んでまいりました。発足当初は、肥料原料高騰の反動により大変なスタートになりました。昨年は肥料価格改定にともなう早取りといった動きはあったようですが、今年は落ち着いた動きのように感じます。

今後、さらにアクションプランを実行し、統合効果を出していかなくてはなりません、長年の

商慣習もあり、なかなか実績として上がってきておりません。

例えば、「銘柄集約」です。

現在当社化成肥料の銘柄は、荷姿数で約460種類にもなります。この内の約20%が主要銘柄で全体販売数量の約70%を占めています。逆に荷姿数の約45%が販売数量の少ない銘柄で、全体販売数量の約5%でしかないというのが実態です。

化成肥料だけでなく、コーティング肥料でも同様のことが起こっています。

販売量の少ない銘柄が多ければ多いほど切替が多く発生し、生産効率は悪化し、コストが上がります。お隣韓国のある会社では高度化成肥料は40種類くらいに集約されているとのこと。日本の農業に貢献するためにも「銘柄集約」は取り組まざるを得ないテーマですが、弊社単独ではなしえない、すべての関係者の協力なしでは実現できない大きなテーマです。向後、こういった視点からも新たな提案をしてみたいと存じます。

日本農業を取り巻く環境は厳しいものがありますが、日本一の肥料会社と認められるべく、全社一丸となって皆様のご期待に添うよう努力してまいりますので、引き続きのご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

皆様のご多幸とご繁栄をお祈りいたします。